

北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association

<北海道熊研究会 会報> 第 106 2021 年 11 月 27 日

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

ご意見ご連絡は本紙送信 email ではなく、下記の email へお願い致します

e-mail: [kadosaki@pop21.odn.ne.jp](mailto:kadosaki@pop21.odn.ne.jp)

既報会報の 1~103 号は Website に「北海道野生動物研究所」と入力しご覧下さい

「北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association の活動目的

熊の実像について調査研究し、熊による人畜及びその他経済的被害を予防しつつ、人と熊が棲み分けた状態で共存を図り、狩猟以外では熊を殺さない社会の形成を図るための提言と啓発活動を行う。この考えの根底は、この大地は総ての生き物の共有物であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限りお互いの存在を容認しようと言う生物倫理(生物の一員として人が為すべき正しき道)に基づく理念による。

<北海道の熊問題で、現在何が問題なのか、解決策を含めてお知らせします>

問題の解決策は、既に確立しているのです

問題は、4 項目あります。

<先ず、①番目として>、

「熊の生息地に山菜採り等に入って、熊に襲われるのを防ぐ対策

これには、呼子「ホイッスル」と鉈の携帯が必需品です。

ホイッスルを時々吹きながら、熊に自分が見つけられる前に、自分が熊を、先に

見つけるような、歩き方する事が基本です。時に、熊に襲われて、反撃しない場合は殺される場合があります。熊は鉋などで反撃された場合、全身の皮膚に痛覚があるから痛いと感じれば、それ以上攻撃してこない事は、過去の事例から明白です。私の調査では、1970年から2016年迄の47年間に、一般人の死亡事故は18件であるが、この中、武器になる物を携帯していたのは3件(事故番号7「マ判小刀」、17「鉋鎌」、88「手鋸」)で、他の15件は素手で対応し殺されていると言うのが実態です。

<襲い来るものに対して、武器(鉋で)で反撃すべきであると、警告したい。無抵抗はひどい場合は殺されると言う事です>

これは、人対人は勿論、獣などに依る攻撃から、我が身を守る共通した総ての場合の、基本原理鉄則です。像使いが「鉤棒」を持ち、猛獣が居る原住民が蛮刀や槍を持ち歩くのも、経験から身を守るための用心の為である。鉋で襲い来る熊に反撃すれば、返って被害が甚大になると、想像で反論する者が居るが、過去の事例の検証では、そのような例は全く無く、杞憂に過ぎない。それよりも、猟師以外の一般人で、熊に襲われて、落命している者は、素手で対抗し、落命しているのが実態です。心すべき事です。

## <②番目として>

### 熊が里や市街地出沒する場合の対応

熊の行動には必ず「目的、理由」があります。総ての熊が里や市街地に出て来る訳ではないが、里や市街地に出て来る場合の熊の目的理由は4大別される。

<出沒の①> 若熊(母から自立した年の子の呼称)が独り立ちして生活する為の行動圏を確立するための探索徘徊過程で、人里や市街地が自分の生活圏として、使える場所か否かを確かめに出て来るのである。主として夜に出て来る。幾晩か出て来る。納得すると出て来ない。

<出沒の②> 道路を横断する目的で出て来る事が有る。

<出沒③> 農作物や果樹や養魚を食べに出て来る。

<出沒の④> その他、力のある個体に弱い個体が襲われて逃げ出る。子が里や市街地に出てしまい母が心配し出て来る。探索に出て来る事がある(下記)6/18の事例)等がある。参照

この対策は、再出を防ぐ為に、電気柵を、その熊が、出て来た場所を、特定して、張る(電気柵は、電源が12V、7千ボルト)これで、続けて出て来るのを予防出来ます。

## ＜③番目として、放牧場、僻地の農地、果樹園、養魚場等の罨対策＞

一時的には電気柵、恒久的には有刺鉄線柵を張る。

- ① 放牧場、「僻地でのいつ罨が出没するか分からない地所での対策には、有刺鉄線柵を恒久的に設置する。
- ② 柵は、目幅縦横 15 ㎝の間隔で、地面から 2 ｍの高さまで、網目状に張る。最下端の有刺鉄線は、罨が地面を掘り込んで潜り込んで侵入するのを防ぐ為に、地面に接して固定する。
- ③ 地面に張った有刺鉄線は、ずれないように、適当な間隔をおいて杭で固定する。
- ④ 長距離に防止柵を設置する場合には、人が出入り出来る様に、約 300m ないし 500m 毎に、幅 1m 程の戸(目幅縦横 15 ㎝の間隔の有刺鉄線の戸)を設置する(錠は人が鍵を無くすることもあるから開閉し得る縦の門か錠にする)。
- ⑤ 果樹が 1, 2 本の場合は、落果範囲の、外周に沿って、有刺鉄線を螺旋状に開き張る。

## ＜④として、農作地での罨による人身事故の予防策＞

罨の生息地付近の農耕地には、8月から10月にかけて、罨が作物を目標に、出沒します。

不意に出会うと罨は人を、襲う事があります。

### ＜その予防策は＞

畑に入る前に、大声を数回、出す。或いは笛（ホイッスルが最善）を数回吹いてから、畑に入る。

これで、人身事故は予防出来ます。

では、＜道ではなぜ、これらの対策を実施しないのか＞

## 我々は、金の問題だと、断じています

と、言うのは；

1989年(32年前)5月末で、熊が減少したとの理由で、春熊駆除の制度を全面的に廃止した。

そして、熊に依る各種被害の予防策と熊の保護を兼ねた対策を目ざす道としての調査が行われる事になった。

以来今日まで、33年間、毎年多額の税を使って(令和3年；今年度は1,950万円)、熊との共存策を探る調査をしてきて居ながら、32年経過した今日未だに、有効な共存共生策を提言し得ないでいる。

これは本州の月輪熊についても、同じだと判断しています。

道が33年間行って来た調査は、「共存策を探る為の調査と言いながら、実態は、それとは無関係の、しかも彼らしか、し得ない事、具体的に言えば、熊の頭数を調べると言って、毛を採取してのDNA調査、自動カメラ(AI camera) intellectual camera 人工頭脳カメラ 熊の識別写真撮影、首輪にGPSと発信器を付けての調査を、エンエンと30年も、続け、今もそれをし続けていると言う事です。

これはどう言う事かと言うと、その金が、調査している会社(連中)の、毎年の飯の種になり続けて居ると言う事です。

本州の熊についても、同じ事が言えると、みています。

こう言った実状を絶ち切らせ、我が国で「熊と人が」共存共生と言う当たり前の事を、実現させるには、政治力が必要だと、強く感じているところです。

(了)